

平成5年度出版「最新地質図幅発表会」を終えて

齋藤 眞¹⁾・西岡 芳晴¹⁾

1. はじめに

昨年夏, 地質調査所本館ロビーにおいて平成5年度出版「最新地質図幅発表会」を開催した(写真1)。ここでは, この顛末を紹介するとともに, 地質図幅の普及をめざした今後の取り組みについて紹介したい。

地質図幅とは, 緯度経度で区切られた5万分の1, 20万分の1などの国土地理院発行の地図の上に, その地域の地質を表現した地質図のことである。地質調査所では創立以来の事業として, 日本の地質図幅を作成してきた。地質図幅の出版は地質調査所の基幹業務である。現在では日本全国のうち5万分の1地質図幅については約70%の地域が出版済となっている。平成5年度に出版された地質図幅は, 研究報告書と図面からなる5万分の1地質図幅が12地域, 図面のみからなる20万分の1地質図幅が3地域である(第1図)。

ところで, これまで今回のような形で地質調査所として新刊の地質図幅の発表会を行ったことはほとんどなかった。平成4年11月に東京で行われた地質調査所研究講演会の際にポスターセッションとして展示した程度で, 現物を見ていただく機会がなかった。しかし, われわれ地質図幅を作成している側にも, 苦勞して作った物なのでぜひ知ってほしいという欲求や, 直接, 現物を前にして, ユーザーの批評を受けたいという欲求がある。そこで, 著者らが幹事となって, 地質図幅の展示会と著者による説明会を開催しようと企画した。

2. 当日までに

実はこの企画の初期には, 毎年数回行っている定例の地質調査所研究発表会で発表してはどうかとい

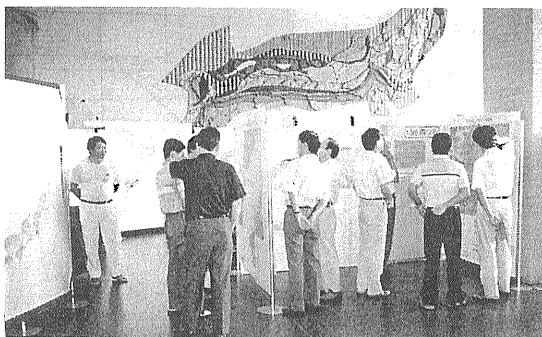


写真1 発表会風景(地質調査所本館ロビー)。バックはロビー壁面の日本地質構造図。それぞれの地質体を特徴づける岩石で作られている。写真提供: 島山浩之氏(総務部業務課広報係)

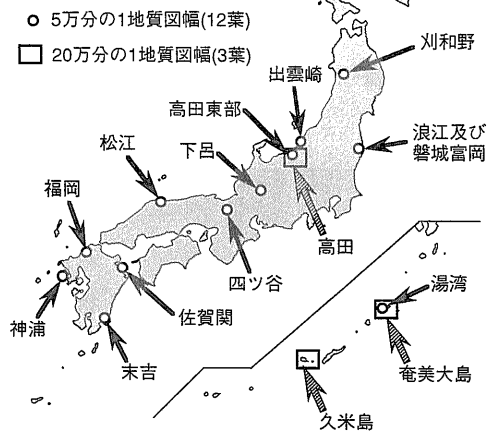
うアイデアがあった。しかし, そこまでは至らず, 結局著者ら2人で“最新地質図幅発表会”と称して, 企画・運営を行うことになった。場所については地質図幅が地質調査所の“顔”をなす出版物であるという考えから, 本館ロビーにポスターセッション用のボードをならべて行うことが最善と考えた。著者らが所属する地質部の一部では“ロビーでそんなことをしてもいいのか”という疑念の目もあったが, かまわず本館ロビーに決定した(実際はなんの問題もなかった)。そして, なるべく人が集まるようにと, 発表会の日程を地質標本館の夏休み相談日に合わせた8月26日金曜日とし, 10時~16時30分の間(ほぼ終日)展示を行い, 昼の地質調査所の職員も集まりやすい12時~13時にそれぞれの図幅の著者などによる説明会を行うことにした。

今回の最新地質図幅発表会では, 平成5年度出版の地質図幅の展示と, 地質図幅が比較的よく揃って作成されている地域の地質図幅を貼り合わせて畳2枚程度の大きさとした企画物の展示を計画した。前者については, 各図幅の著者などに展示の方法はまかせ, 報告書の図表や岩石資料等の展示をお願い

1) 地質調査所 地質部

最新地質図幅

地質調査所
平成5年度発行



第1図 平成5年度発行の地質図幅の位置図



写真2 顕微鏡とカラーモニターを使って微化石の説明をする柳沢幸夫氏(地質部広域地質課)。微化石は近年の地質学に革命的影響をもたらした。現在では微化石の研究は地質図の作成に不可欠なものとなっている。写真提供：吉岡敏和氏(地質部層序構造課)

した。後者については先の研究講演会で使用したものに平成5年度出版の地質図幅と現在作成中の地質図幅の一部の原稿のカラーコピーを著者の同意を得て貼ることにした。

展示会を行うと決めて準備にかかったのが7月下旬であったので、著者ら企画者は、出遅れを取り戻すべく、8月に入って広報活動を行った。所外では近郊の地質関係者を対象とし、関東の大学の地球科学系学部等、各県のつくば事務所、科学技術庁研究交流センターのつくば研究学園都市の壁新聞 (Science Communication)、地質調査所で図幅関連の仕事をし現在も民間でコンサルタント業務等を行うOBなどなどに、ポスターと案内状を発送した。また、つくば研究学園都市の記者クラブにも同様の案内を送付した。さらに、コンピュータネットワークの情報板にも案内を掲示した。

これらと相前後して、著者や関係者に各図幅の紹介文を書いていただき、当日のパフレットを作成した(一部は第1表)。

3. さて当日は

平成5年度発行の各地質図幅についてはそれぞれの著者や関係者で前日のうちにほぼ展示は完了した。見栄えは“まずまず”というのが印象であった。

翌8月26日、朝8時頃から本館玄関や地質標本館前に案内を掲示し、準備万端整った。近年の地質図

幅の作成には、放散虫や珪藻といった微化石の研究が欠かせないものになっていることから、地質部の柳沢幸夫氏による顕微鏡とカラーモニター、カラープリンターを組み合わせるコーナーも誕生した(写真2)。また、地質図は緯度経度ごとの岩石を網目状に採取して地質図を作るなどといった地質図作成についての誤解を持っている人がいることから、ルートマップなどの生のデータから地質境界を定めて地質図を作成する経過を展示した地質図幅の展示も行った。

10時になって受付を開始し、平成5年度発行地質図幅のパフレット、地質図の説明のカラーパフレット、アンケートを受付で配布した。午前中は他の仕事で見えた印刷業者の方や地質標本館で実習中の方などがみえただけで閑散としていた。お客さんの多い地質標本館とは対照的で、ある程度予期していたこととはいえ“少々がっかり”という感じであった。

12時の説明会近くなると所員、OBの数が少しずつ増えていった。12時になって、説明会が始まると、所員の中でも地質を専門としない研究者や事務系の方の参加があり、それなりの賑わいをみせるようになった。地質調査所所員にとっても、実物を前にして説明を受けることによって、地質図幅とはこのような物だと再認識していただけたようである。また、地球物理、地球化学を専門とする地質調査所の研究者の興味を引き、話が弾んだ地質図幅も

第1表 平成5年度発行の地質図幅一覧

20万分の1地質図幅

図幅名 (税抜き価格)	特徴	著者
高田 (¥2,600)	高田地域では、東部の越後山脈に足尾帯・上越帯の付加体・浅海成堆積岩・深成岩類や、谷川岳に見られるような蛇紋岩が分布し、日本海沿いを中新世以降の新潟堆積盆地の堆積物が占める。また、第四紀火山も多く、山麓にはスキー場も多い。	竹内圭史 加藤碩一 柳沢幸夫
奄美大島 (¥1,800)	北西部を秩父帯が占め、中部を四万十帯北帯、南東部を四万十帯南帯が占める。北東-南西方向の走向をもつこれらの地質体の地質構造が明瞭に示されている。	竹内 誠
久米島 (¥1,800)	本地域には、渡名喜島、慶良間列島、久米島、粟国島などが含まれる。渡名喜島は、秩父帯に属し、慶良間列島は四万十帯に属する。久米島・粟国島は、古い火山の島である。これらの島の周囲には珊瑚礁が発達している。	佐藤喜男

5万分の1地質図幅（研究報告書付き）

図幅名 (税抜き価格)	特徴	著者
刈和野 (¥2,400)	秋田市の南東、秋田油田堆積盆地の中部に位置する。第三紀漸新世-中期中新世の主に火山岩からなる地層が東部に分布し、中期中新世以降の主に堆積岩からなる地層が中-西部に分布する。隣接する地域で後者から石油・天然ガスを産する。	土谷信之 吉川敏之
浪江及び 磐城富岡 (¥3,300)	本地域は、地形的には双葉破砕帯によって海岸沿いの第三系~第四系の丘陵地帯と花崗岩類の山地に2分されるが、構造区分としては、花崗岩類を2分する畑川破砕帯が、北上、阿武隈の両花崗岩類の境界として重要である。	久保和也 柳沢幸夫 吉岡敏和 高橋 浩
出雲崎* (¥3,200)	東頸城丘陵の北部にあり、佐渡の対岸である。本地域は新潟県南部に広がる新潟堆積盆地の一部で、褶曲構造が明瞭に示されている。	小林巖雄 立石雅昭 植村 武
高田東部 (¥2,900)	本地域は、石油や天然ガスを多く産出する新潟堆積盆地の南西部である。新潟堆積盆地は中新世以降に堆積した厚さ4000m以上の堆積物からなっている。	竹内圭史 加藤碩一
下呂 (¥2,700)	主に白亜紀後期の濃飛流紋岩類からなる。南西部にはそれらに覆われる美濃帯のジュラ紀~白亜紀初期の付加コンプレックスが分布する。また、第1級の活断層である阿寺断層が北東部(下呂温泉付近)を通過している。	脇田浩二 小井土由光
四ツ谷 (¥2,500)	丹波帯の付加コンプレックスからなり、北西部と南東部の一部を"I型地層群"が占め、残りの大部分は"II型地層群"が占める。チャートと砕屑岩類が東西方向に連続することが明瞭に示されている。	木村克己 中江 訓 高橋裕平
松江 (¥3,300)	北部の島根半島と南部の中国山地に挟まれて、宍道低地帯が東西に伸びる地域である。島根半島には第三系、中国山地には新第三紀と白亜紀後期-古第三紀の火成岩類、時代未詳の接触変成岩類が分布する。宍道低地は第四系が占める。	鹿野和彦 山内靖喜 高安克己 松浦浩久 豊 運秋
福岡 (¥3,700)	基盤は、古生代から中生代の三郡変成岩類、白亜紀の花崗岩類、石炭層を含む古第三系の地層である。それらを第四系の河成段丘、沖積層が広く覆う。報告書には第四系の分布する福岡市内の詳しい地質図と地質断面図が示されている。	唐木田芳文 富田幸臣 下山正一 千々和一豊
神浦 (¥2,800)	西彼杵半島中央部を占め、大部分を長崎変成岩類が占める。これを不整合に覆う古第三紀堆積岩類、中新世の火山岩類からなる。古第三紀堆積岩類は炭層を挟んでいる。	服部 仁 井上英二 松井和典
佐賀関 (¥2,600)	佐賀関半島の三波川変成岩類が本地域の大部分を占める。本地域は三波川変成岩類の露出する地域の西端に近い。三波川変成岩類の内部構造に詳しい。	宮崎一博 吉岡敏和
末吉 (¥3,100)	九州南東部位置する。基盤は四万十帯の付加コンプレックスからなる。主に南帯の古第三系(一部新第三系)からなり、西部は北帯の白亜系からなる。これらを後期更新統の入戸火砕流堆積物が広く覆っている。	斎藤 眞 佐藤喜男 横山勝三
湯湾 (¥3,200)	奄美大島主部を占め、秩父帯と四万十帯の付加コンプレックスからなる。本地域北西部で秩父帯の付加コンプレックスが低角の衝上断層で四万十帯の付加コンプレックスに衝上しているのが明瞭に示されている。	竹内 誠

* 研究報告書は平成4年度出版(販売は図面と一括)

あったようである。展示会場の一画では、環境地質部環境地質課の磯部一洋氏によって“筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図”の説明があり、地元の方の興味を引いていたのは印象的であった。

説明会が終わると、最初の閑散とした状況に戻り、地質標本館のお客さんがついでに見ていこうかというくらいになって、16時30分の終了を迎えた。結局、外部の参加者は25名程度であった。

4. 新年度に向けて

さて、平成6年度はこのように“それなり”の成果にとどまった。所内向けではまずまずの成果が上げられたのではなかろうか。しかし、所外的には行動開始の遅さ、宣伝方法のまずさなど初めての試みであることによる不手際があったと思われる。やはり「継続は力」ということもあり、平成6年度出版の地質図幅については、今年度+αの企画を加えて開催していきたいと思う。

一つの案として、現在新規出版物は順次本館ロビーの掲示板に公開されているが、ひと月程度本館ロビーに新規に出版された地質図幅をまとめて掲示することが考えられる。また、年2回東京で行われている“地質調査所研究講演会”の一部で最新地質図幅を掲示することも考えられる。さらに、地図の展示会に便乗することも一案であろう。インターネット上で地質図幅のカタログをファイルにして公開するのもよいと思われる。さらに、本年は日本の地質学をリードする地質学雑誌に書評という形で地質図幅の紹介がされた(9月号以降)。このような企画に便乗する形で発表会を催すのも一つの案であろう。とにかく、各研究者協力を得られるように著者の負担を最小限にして、この様な発表会を継続して行っていく必要がある。これについては読者の皆様の意見をお聞かせいただきたいところである。

5. おわりに

地質調査所は工業技術院の他の研究所とは異なり、特許等が少ない代わりに、出版物が研究成果そのものである。その成果を広く一般に知っていただく努力をこれまで地質調査所として尽くしてきたか、はたいそう疑問である。

今回、来客者にアンケートに答えていただいたが、その内容からは所外の方々在地質図幅に興味を持っているのにもかかわらず、それに答えられるだけの広報活動が行われていないことが感じられた。このことは、たとえば地質図幅がどこで手に入るか知っている人が少ないということから読み取れた。

これまで、我々、特に研究者に「研究してればOK」という考えはなかつただろうか。科学だけでなく広く社会に貢献することが求められている昨今、もっと各研究者が社会にアピールすることを意識する必要があるのではなかろうか。また地質調査所としてもそれを推進し、地球科学の分野での情報センターになって行くよう、早急に強力なシステムの構築が必要ではないか。今回、個人レベルで“最新地質図幅発表会”を企画してこのようなことを強く感じた次第である。

謝辞：今回の最新地質図幅発表会においては、各地質図幅の著者の皆さんや地質調査所地質部の皆さん、同地質情報センター情報管理普及室と同総務部業務課広報係の皆さんにはたいへんお世話になりました。紙面を借りて感謝申し上げます。

SAITO Makoto, NISHIOKA Yoshiharu (1995): The exhibition of the geological sheet maps published in fiscal 1993.

〈受付：1994年9月13日〉